

新着案内

町田の文学

第43号 2019.8.1 発行 町田市民文学館ことばらんど



国松俊英氏

1940年滋賀県生まれ。同志社大学卒業後、童話創作グループで勉強を始め、第2作『おかしな金曜日』出版後、文筆業に専念。1989年から町田市在住。

町田在住の児童文学作家、国松俊英氏が、今年第二回児童文芸ノンフィクション文学賞特別賞（日本児童文芸家協会主催）を受賞した。
それは、二〇一七年に出版した研究・解説書『ノンフィクション児童文学の力』（文溪堂）の内容が評価されたこと、また長年にわたってノンフィクションを広めようと活動してきたのと、後進の育成に力を注いできたことが認められたものである。
今回は、受賞を記念し、最新刊『ライチョウを絶滅から救え』（小峰書店二〇一八）を中心に、ノンフィクション作品とはどのように書かれるのか、「ノンフィクション児童文学の力」とは何か、を語っていただいた。

「児童文芸ノンフィクション文学賞特別賞」受賞記念

国松俊英氏（児童文学作家）インタビュー ノンフィクションの「力」

長年あたためていたテーマ

——このたびは受賞おめでとうございます。国松さんはノンフィクション児童文学という分野を、長年切り開いてこられたわけですが、その「力」について、最新作の『ライチョウを絶滅から救え』からうかがわせてください。この本は、特別天然記念物のライチョウを、絶滅の危機から救おうとする人々の奮闘を描いたものですが、どんなきっかけや経緯があつてお書きになったものなのでしょうか。

この本は二〇〇九年の「ライチョウ会議・東京大会」で「ライチョウと日本人の関わり」について話してほしいという依頼を受けたことから始まりました。私は鳥が好きで、鳥と人間の関わりを調べたり書いたりしています。ライチョウの文化史は当時よく知らなかったのですが、いろいろな方面から資料を取り寄せて勉強し、発表に臨みました。その中で、今の子どもたちや若者がどのくらいライチョウを知っているか、興味を持っているか、独自のアンケート調査をして、その結果も発表したので喜んでいただけましたね。

一方、その大会でライチョウが想像以上に厳しい状況にあることを知ってショックを受けました。けれど強い関心を持つようになり、書いてみたいと思うようになりました。でもライチョウの研究と保護の第一人者、中村浩志先生（鳥類学者・信州大学名誉教授）がおられ、大人向けにいろいろ書いておられました。子ども向けとはいえ、内容の同じことを書いてもしようがないと思って、しばらくストックの中に入れておいたんです。

そうこうするうちに二、三年前、ある編集者から「子ども向けノンフィクションシリーズを出したいので若い書き手を紹介してほしい」という話がありました。紹介するだけと思っていたら「国松さんも書いてくださいね。何を書いてくれますか」と言われて、あわててしまい、とっさに「ライチョウ」って言ってしまいました（笑）。

「長野に中村先生という研究者がいます。元々ライチョウの専門家ではなかったのだけど、学生の時にライチョウの調査を手伝ってノウハウを学び、今は日本のライチョウ研究



『ライチョウを絶滅から救え』
(小峰書店 2018)

と保護の第一人者です。その人を中心に置けば面白いものが書けるでしょう」とという話をしたら、編集会議を通してしまいました。中村先生にOKして頂くことができました。その後、何度も長野の先生の研究所に通い、資料等を見させていただいたり、話を聞かせてもらって書き始めたのです。

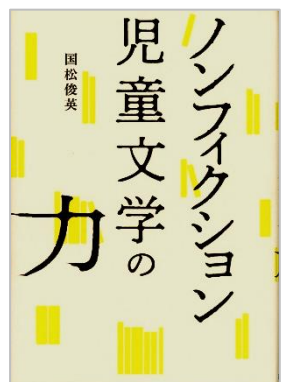
ノンフィクションを 文学たらしめるもの

——中村先生の学生時代のこと、一四年を経て一九八一年に再びライチョウ調査を依頼された時のことなど、国松さんが直接目にしていなかったことが、眼前で起こっているように描かれています。かなり中村先生に密着して、詳しくお聞きになったのですか。

どんなノンフィクションを書く時も同様ですが、その情景が目の前に浮かんでくるくらい、しつこく聞きます。それと、当時のことを書いた報告書や本などを丹念に読むことで「状況証拠」のようなものをいっぱい集めて、イメージをふくらませます。そうすることで、読者がその情景を、くつきりイメージできるように描くことができるのです。

『トキよ舞いあがれ』（くもん出版一九八八）に取り組んでいた時に、田んぼにうずくまって、何日もじっとトキが飛んで来るのを待っているトキの研究者を取材したんですが、何度も

『ノンフィクション
児童文学の力』
(文溪堂 2017)



話を聞いているうちに、自分も田んぼでトキを待っている夢を見てしまいました（笑）。そこまでいくと、かなり自分のものにできているなという感じです。

ライチョウにしても、トキにしても、厳しい状況にあることを子どもたちに知らせたいということもありますが、主人公になる人たちの熱意や努力はすごいものです。そうした人間の生きざまを描くことがノンフィクション児童文学の魅力だと思っています。実績を書くだけでは、文学とは言えないのです。

ノンフィクションへの開眼

——児童文学作家として、最初からノンフィクションの分野を目指していらしたのですか。

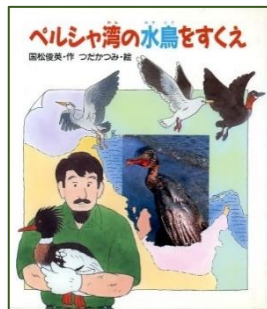
作家を志した時は子ども向けのフィクション、童話や児童小説を書くつもりだったんです。二作ほど書いた頃から、会社勤めとの両立は難しいと思うようになり、三八歳の時に会社を辞めました。家内は驚きましたが、やれるとこまでやったらいいでしょう、と言ってくれま



2010 年に作家や編集者たちと〈ノンフィクション児童文学研究会〉を立ち上げ、研究活動も行っている。

『トキよ未来へはばたけ
ニッポニア・ニッポンを守る人たち』
(くもん出版 2011)
第7回福田清人賞受賞

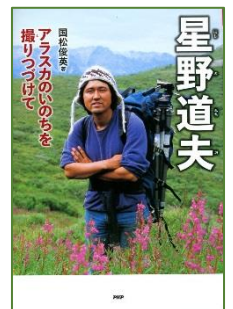
『星野道夫
アラスカのいのちを
撮りつづけて』
(PHP 研究所 2016)



『ペルシャ湾の水鳥をすくえ』
(金の星社 1994)



『はばたけ オオタカ
密猟者からオオタカを守る人びと』
(くもん出版 1986)



した。

雑誌に小さな連載の仕事などをしていた一年、オオタカを密猟から守るために二四時間交替で見張りをしている人たちの新聞記事を読みました。興味を持ってすぐに、西那須野へ会いに行きました。その熱意や利益など考えない姿に感動して、当時担当していた雑誌の連載に書きました。それが出版社の人の目にとまり、「おもしろいから、子ども向けに書きませんか」と言われたのです。でも私はその話が、子ども向けの本になるなんて思えませんでした。

ところが編集者に「オオタカがいない時代になっちゃったら大変でしょう。それをどうやって守っていくのか、子どもだって知りたいですよ」と言われ、なるほどと取り組んだのが、初めての子ども向けノンフィクション『はばたけオオタカ』(くもん出版一九八六)です。

実はこの本を一番喜んでくれたのは、活動をしてきた人たちでした。彼らはその都度記録はつけているけれど、まとまったものは持っていないで、改めて思い出して「こんなこともあった、あんなこともあった」と、記録は詳しく正確になっていきました。「こういう記録ができて、私たちがやってきたことを全部ふり返ることができる」と、とても喜んでくれたのです。

その時私も気づいたんです。「ノンフィクシ

ョンっていうのは、一つの事実をきちんと記録して残していく、人間の世の中で大切なことなんだ」と。それまで、自分がやったことをきちんと書き留めて本にするのがノンフィクションだと思っていました。けれど、他の人がちゃんと話を聞いて、資料を調べなおして、それをまとめたなら、ノンフィクションになるんだということに気づきました。もともと営業マンだったので、知らない人から話を聞くのは平気でしたし(笑)、調べるのも好きでした。しかも当時連載していた雑誌の記事は、気づけば素材になるものが多く、それが私のノンフィクションのスタートでした。

プロは豊富な「ネタ帳」を持つ！

——先ほど、ライチョウのことはしばらくストックに入っていたとのことでしたが、そういった題材はどのように見つけるのですか。

九一年、湾岸戦争でペルシャ湾が原油で汚染され、鳥たちが油まみれになっているというニュースが流れました。鳥好きの人があれを見たら、誰だって助けに行きたいって思います。私もそうでした。ところが調べたら、サウジアラビアに外国人は簡単に入れない。私は諦めたのですが、諦めずに行った人たちがいました。川崎の獣医さんなど三人の救援チームです。彼らのことをぜひ書きたいと思い、報告会に行った

ら、児童文学の大先輩も来ていました。ああ、これは私には書く機会がないなと思い、資料だけをもらっておきました。

ところが少したってから、子ども雑誌の編集者から「雑誌に書いてくれないか」という依頼が来ました。そこで獣医さんに確認したら、「誰も話を聞きに来ていない」ということで、「私に書かせてくれませんか」とお願いし、快く承諾していただきました。

結局その出版社では雑誌に短編が掲載されただけだったのですが、取材を通じてぜひ一冊の本にしたいと思うようになりました。早速企画書を作成して、別の出版社に持ち込み、『ペルシャ湾の水鳥をすくえ』（金の星社一九九四）という本ができ上がったのです。

新聞やテレビのニュース、人との出会いなどからいろいろなネタ、題材をストックしておき温めています。私の「ネタ帳」は今もいっぱいです（笑）。

ナチュラリスト賢治を書きたい！ 若手も育てたい！

——最後にこれから書きたいと考えていらつしやるテーマを教えてください。

私は宮沢賢治が大好きです。けれど、賢治の生涯を子ども向けに書いたものは多く出ていますが、とても不満でした。賢治はご存知のように、自然の中を歩き回り、いつも自然

と対話していました。そして、そこから得たものを詩や童話にあふれさせるといった、真の意味で自然と共に生きた人でした。でも、そういう賢治の姿を描いた伝記がありませんでした。「ナチュラリスト賢治」に焦点を絞ったものをぜひ書きたいと思っています。

それと、ノンフィクションを書きたいと思っ

ている人たちに、どうしたら作家になれるか、その道筋を示せるような「場」が、文学館のよいな施設で持てるのではないかと考えています。今児童文学界ではノンフィクションの若い書き手の登場が待ち望まれています。若い実力のある作家を育てるのも、私のこれからの仕事だと思っています。

（初夏 文学館にて）

国松俊英氏の主なノンフィクション著作リスト

はばたけオオタカ 密猟者からオオタカを守る人びと（くもん出版 1986）
野鳥はともだち ぼくの野鳥ノートから（童心社 1987）
トキよ舞いあがれ 国際保護鳥・トキを絶滅から守る人たち（くもん出版 1988）
ゲンジボタルと生きる ホタルの研究に命を燃やした南喜市郎（くもん出版 1990）
オシドリからのおくりもの（くもん出版 1991）
野鳥とともに生きる 中西悟堂（岩崎書店 1992）
ペルシャ湾の水鳥をすくえ（金の星社 1994）
鳥を描き続けた男 鳥類画家 小林重三（晶文社 1996）
最後のトキ ニッポニア・ニッポン（金の星社 1998）
ここが世界の中心です 伝道者メレル・ヴォーリズ（PHP 研究所 1998）
アホウドリが復活する日（くもん出版 1999）
カラスの大研究 都会の悪者か神さまの使いか（PHP 研究所 2000）
鳥の博物誌 伝承と文化の世界に舞う（河出書房新社 2001）
星野道夫物語 アラスカの呼び声（ポプラ社 2003）
スズメの大研究 人間にいちばん近い鳥のひみつ（PHP 研究所 2004）
理科室から生まれたノーベル賞 田中耕一ものがたり（岩崎書店 2004）
ハトの大研究 古代から人とともに生きてきた鳥（PHP 研究所 2005）
ツルの大研究 人に幸せをはこぶ鳥のひみつ（PHP 研究所 2006）
フクロウの大研究 知恵と学問の神といわれる鳥（PHP 研究所 2006）
巣箱 森のいのちを育てる（くもん出版 2007）
信長とまぼろしの安土城（文溪堂 2008）
ホタルがすきになった日 都会にホタルを取りもどした阿部宜男（佼成出版社 2009）
トキよ未来へはばたけ ニッポニア・ニッポンを守る人たち（くもん出版 2011）
鳥のいる地球はすばらしい 人と生き物の自然を守る（文溪堂 2016）
星野道夫 アラスカのいのちを撮りつづけて（PHP 研究所 2016）
ノンフィクション児童文学の力（文溪堂 2017）
宮沢賢治の鳥（岩崎書店 2017）
ライチョウを絶滅から救え（小峰書店 2018）

このほかにも絵本、童話、児童小説、知識の本など
130 タイトルに及ぶ著作がある。

新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。



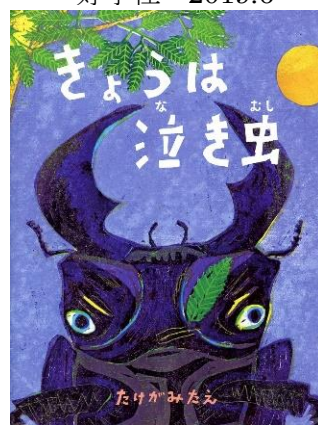
『詩集 九月の秋風』『詩集 片々好雪』
横倉修一／著 土曜美術社出版販売 2019.2

横倉 修一

1936 年生まれ。横浜国立大学工学部卒。企業を定年後も大学院で心理学などを学ぶ。工学博士、心理学修士。町田市在住。

著者の第三、第四詩集。本年二月に同時刊行された。終戦直後、疎開先で小児結核を患い、二年間の絶対安静を強いられた経験から、内省的傾向の強い思想に親しんできたという。多くの詩に風景が描き出されている。ある時は美術館であり、神保町であり、ある時は病院の階段の踊り場であり……。詩人の目を通すと、いつもの見慣れた情景にこんなにも言葉が生まれるのかと、ふと立ち止まってみたい気持ちになる。なにげない「場」を豊かにする詩の力を改めて感じさせる。だが詩人はこうも言う。「言葉」をもつて汚すことなかれ」。

『きょうは泣き虫』
たけがみたえ／著
好学社 2019.6



月夜の虫たちの、相撲大会という饗宴。迫力ある版画だ。日本の絵本界に力ある新人登場！とさえ言いたくなる素晴らしい版画である。本作は、すつとぼけただじやれが作者をほうふつとさせるデビュー作『マンボウひまな日』（絵本館）、表紙が印象的な『ふくろうのオカリナ』（文・蜂飼耳理論社）に続く三作目となる。「牛に囲まれた衝撃から、生き物と目が合った瞬間「見たら見られた」をテーマに木版画を制作している」という。さっぱり分らないが、面白そうである。これからが楽しみだ。

たけがみ たえ

1986 年生まれ。Mokuhanger（木版画家）。幼稚園から大学まで和光学園に通う。町田育ち。和光大学表現学部芸術学科卒。2013 年熊谷守一大賞入選。

【主な寄贈雑誌】

文芸誌：「相模文芸」「文芸多摩」「ベルク（山の文芸誌）」「三田文学」

詩 誌：「璞（あらたま）」「構図」

短歌誌：「青垣」「歌と観照」「開耶（さくや）」

「日本歌人クラブ 風」「玉ゆら」「はなさい」

俳句誌：「青芝」「阿夫利嶺（あふりね）」「訝（こだま）」

「都市」「風土」「波」「俳句界」

「蒼茫（そうぼう）」「八千草」

その他：「多摩のあゆみ」「隣人」

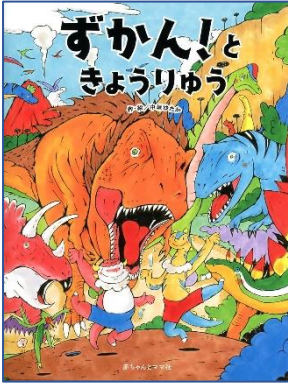
新刊紹介

寄贈いただいた町田在住の方の著書を中心に紹介しています。
著者紹介は「著者略歴」などをもとに作成しています。

『ずかん！ときょうりゅう』

中垣ゆたか／作・絵

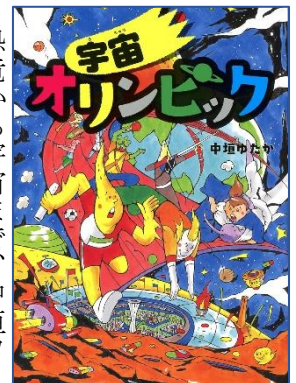
赤ちゃんとママ社 2019.5



恐竜から宇宙まで、中垣ワールド全開。『ずかん！ときょうりゅう』はキャラクターと一緒にページを進み、いろいろな恐竜に出会う。恐竜学の最新情報も満載なので、「恐竜マニア」の子どもたちも満足させることができるだろう。『宇宙オリンピック』は来年に向けて盛り上がるオリンピック・パラリンピック熱に、「こう来たか！」というアイデアにあふれた楽しさだ。見返しを使って「地球子ども新聞」まで作る念の入れよう。大人も楽しむことができる。

『宇宙オリンピック』中垣ゆたか／作

くもん出版 2019.6



中垣 ゆたか

1977年生まれ。イラストレーター、絵本作家。『カムチャッカ号へんてここうかい記』(風濤社)、『ひらいてびっくり！のりもののりもの』(偕成社)などの絵本をはじめ挿絵、雑誌表紙など多数の作品がある。町田市在住。

町田ゆかりの作家新着本から



『とんかちこぞうとねこざかな』

わたなべゆういち／作・絵

フレーベル館 2019.4

『ひをふくやまとあおいぬま』

安藤美紀夫／作 長谷川知子／絵

子どもの未来社 2019.5



市民の皆様の文学作品をご寄贈ください

町田市民文学館では、市民の皆様が著した文学作品（詩歌、小説、エッセイ、児童書や同人誌など）を収集・保存しています。ぜひご寄贈ください。

また、勝手ながら、貸出用と保存用の2冊をご寄贈いただけますと幸いです。今後とも市民の著作の収集に努めてまいりますので、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。



三田村信行『漱石と熊楠 同時代を生きた二人の巨人』

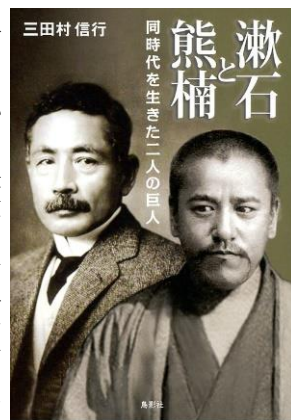
本稿は新刊刊行を記念し、著者の三田村信行さんより、特別にご寄稿いただきました。

本書を書く時にいちばん苦労したのは、研究資料の多さでした。漱石には「研究史」なるものがあって、膨大な漱石研究の文献が列挙されていますし、熊楠は熊楠で、近年に研究が盛んになったせいもあって新しい資料や研究がつつぎに公開され、応接の暇もないありさまで、できるだけたくさん資料を読みこんで、自分なりのイメージをつかむのは、ノンフィクションを書く時の必須の作業ですが、こうも多くては、かえって資料の森に迷い込んでしまう恐れがあります。そこで、えいやっと思いきって、ある

思わぬ副産物

三田村 信行

町田ゆかりの作家、三田村信行さんが四月に上梓した『漱石と熊楠』。日本近代の巨人たちの生涯を日記や手紙から、あたかもそこに二人がいるかのような、人間の匂いの感じられる存在として描き出した本作を、著者ご自身に語っていただいた。



発行／鳥影社
2019年4月

三田村 信行

1939年東京都生まれ。早稲田大学在学中に早大童話会に入会、創作を始める。ミステリーやファンタジー、歴史小説、時代小説、ノンフィクションなど幅広い分野の児童文学を手がけている。巖谷小波文芸賞(2009)、『風の陰陽師』で日本児童文学者協会賞(2010)受賞。78年より町田市在住。



(撮影／タカオカ邦彦)

時点から新しい研究資料に目をつぶることにしました。そんな次第で、本書にはいくぶん古びた漱石と熊楠のイメージが感じとれるかもしれません。

研究者のフィルターを通さない、いわば素の漱石と熊楠のイメージは、本人たちが残した手紙や日記からつかむことができますが、相手のある手紙より、誰はばかることなく書いてある日記のほうが、より等身大の漱石と熊楠をうつしだしているような気がします。

漱石の日記は、身辺雑記、友人・知己・

家族の動静、自分の病状、取材記事、旅行見聞、世情考察など多岐にわたっていますが、比較的長文のものが多く、文学者らしい自己分析に長けた文章で日常茶飯を豊かに記録しています。

これに対して熊楠の日記は、おおむね短文で、即物的に自らの日常を記録していますが、菌類や藻類の収穫、幼児期の息子や娘の観察、自分の見た夢の記録と分析なども記されていて、科学者・博物学者の一面がのぞかれます。

余談ですが、わたしも若い頃から日記をつけていました。日々の出来事を事細かに取り上げ、感興を覚えた事柄には感想を加えるなどして、漱石ばりに長々と記していました。けれど、いつも三日坊主で、長続きしませんでした。

けれど、熊楠の日記の簡潔でむだのない記述に感心し、それを真似てみることにしました。日々の出来事を箇条書きにし、感想は数語で記すなどしてみると、ほとんど手間がかかりません。以来二十数年、毎日欠かさずに日常を記録し続けており、最近とみに衰えてきた記憶を蘇らすよすがになっています。これは、本書を書くことによって得た思わぬ副産物といつていいかもしれません。

寄稿

文化と歴史 再発見の旅へ

浅原雄吉(町田市小山田在住)

小山田与清研究会へのお誘い

とも きよ

このほど天皇になられた徳仁様が水の研究をされていることは、たびたび報道されてきたので記憶されている方もおられるかもしれませんが。その天皇の御著書の一つに『水運史から世界の水へ』と題する論考があり、その中で埼玉県さいたま市の「見沼通船堀」について詳しく述べられています。

見沼通船堀というのは、徳川吉宗の時代に干拓用に造成された運河の名称で、用水路を利根川と結ぶことで新田を開拓するとともに、江戸と見沼地域との間で物資の流通に多大な利便をもたらした運河でした。運河は用水路と利根川の水位差をパナマ運河に見られるような幾

つかの閘門を設け、水を貯めて通船を可能にする仕組みで、これは明治まで機能していたと言います。

実はこの事業を推進した人は高田茂右衛門と言います。彼は報償の代わりに通船の権利と西神田の屋敷を幕府から賜ったと伝えられています。通船堀開設の一〇〇年後、高田家に養子に入り、この経営にあたったのが町田から出た幕末の三大国学者の一人、小山田与清でした。

小山田与清とはどんな人？

与清は武蔵国多摩郡小山田村(現在の町田市上小山田町)の田中忠右衛門本孝の次男として天明三(一七八三)年に生まれました。幼少時から旺盛な向学心をもち、一九歳の時江戸に出て国学者村田春海(はるみ)に入門。早くから群書探究と字義の考証に生涯をかけて取り組み、多くの書を残しました。二二歳で父の死を契機に、冒頭述べた幕府通船方の豪商高田家に、養子として

るのです。

高田家を継いだ与清は、通船事業経営とともに倭学に精励し傍ら万巻の書を集め、これを好学の士に供するため庭に蔵書倉を建てることを思い立ちます。そして誕生したのが「擁書楼」という図書館でした。日本には奈良時代から唐来の仏典を収めた「芸亭」という書房が知られ、これをわが国の図書館の嚆矢とする説もありますが、芸亭の方は仏僧に開かれたもので、広く民間に開かれたものとして、わが国最初の図書館は、小山田与清が開設したこの擁書楼だったと言えます。

そしてこの擁書楼には与清の思惑通り、当時のさまざまな著名人が集いました。例えば、文人では大田南畝、山東京伝・京山兄弟、狂歌師では北川真顔、絵師では鋤形蕙齋、谷文晁、土佐派の絵師高橋千春、また国学者では与清と並び幕末の三大国学者と呼ばれた平田篤胤、伴信友をはじめ、屋代弘賢、清水濱臣、岸本由豆流や後世考証家として広く知られる山崎美成、喜多村信節など、みな当代一流の知名人たちですが、そればかりではなく医師や僧侶、石工、瓦師、煙管屋といった職人もいれば、芸子までもがやって来るまさにサロンとなったのです。



小山田与清肖像
(『小山田与清』紀淑雄
裳華房 1897年刊より)

実はこうした多くの人を集めた裏には与清独自のアイデアがあったのです。それは与清が字義と群書搜索という課題を専門にしているところから発想した、図書の画期的な検索方法を考案した所にありました。彼はこれを「いろは函」と称し、友人の蔵書家たちにも広く推奨しています。

こうして文化末年から天保期にかけて知られた擁書楼はその後どうなったかという点、与清は文政二（一八一九）年、華頂宮尊超法親王かちょうのみやそんしょうほっしんのうの御前を許され、聘に応じて徳川齊昭なりあきの和歌指導を、また水戸史館にも招請があり、蔵書のほぼすべては齊昭の水戸家に寄贈されました。

現在不在の与清研究者

小山田与清については明治の中頃から検証が始められ、まず伝記『小山田与清』が紀淑雄きのとしおによって明治三〇年に出版されます。これを境に与清の著作は今日まで二〇点ほど活字化されてきました。しかし昭和以降は国学への関心の薄れもあり、与清検証は止まってしまいました。近年になって漸く、筑井の安西勝氏が出て与清探究に生涯をかけて取り組まれましたが、それも二〇〇四年氏の没後は研究者不在のまま今日に至っています。

与清が著した著作は三〇〇点以上、そのうちこれまで活字化されたものは僅か二〇点、彼の著作の一角にも満たない数字なのです。さらに、すでに活字化されたものは明治・大正期のもので、旧字が多く、文体も古い上、解説なしでは今の私たちには理解の及ばないところがあります。

私たち市民の手で与清の探究を

いま私たちの周辺ではコンピュータリゼーションの第三次の波が押し寄せ、古いものを急速に過去の中に凍結させようという時代の流れに直面しています。それは与清の功績をそのまま化石させてしまうことにもなりかねません。果たしてそれでよいのか。今、こうした問いに答えを出すべき時が来ているのではないのでしょうか。

そこで望まれるのは、今からでも、与清のすべてを探索検証し、現代の私たち誰にでも理解できるものとして残すことではないでしょうか。

町田市民文学館の市民研究員制度を活用し、町田郷土の国学者小山田与清の業績探究を、ご賛同いただけるあなたと共に進めようではありませんか。

町田市民文学館市民研究員制度について

町田市民文学館では、市民の自主的な文学活動を支援するため、「市民研究員制度」を設けています。

この制度は「活動の成果がより多くの市民に還元されること」を前提とし、一定の条件のもとに申請していただき、制度の目的にふさわしい研究テーマに対して、文学館として活動場所や資料提供などのサポートをさせていただく市民協働事業です。

これまで「五十嵐浜藻・梅夫研究会」「児童文学研究会」などがその成果を冊子にまとめています。

詳しい制度要項、申請書などについてのお問い合わせは文学館まで。

●執筆者紹介
浅原雄吉（あさはら ゆうきち）
「五十嵐浜藻・梅夫研究会」の一員として町田市民文学館の市民研究員制度による古俳書研究（二〇二二〜一七年度）を進め、その成果として『翻刻 八重山吹』『翻刻 草神楽』『五十嵐祇室・梅夫・浜藻来簡集』を刊行。二〇一六年には研究発表会（五十嵐梅夫・浜藻の旅と俳諧）も行った。町田市在住。

〈貴重雑誌をめぐる物語〉

文学館の貴重書庫には、文学史的に重要な雑誌や、町田ならではの地域芸誌など、約八六〇タイトル、一万冊余が所蔵されています。日頃、あまり目に触れることのないそれらの雑誌から、主なものを順次ご紹介いたします。

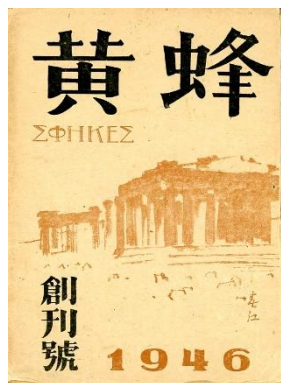
その三

きばち

総合雑誌「黄蜂」

編者…寺田 守
発行所…黄蜂社
刊行頻度…不定期刊
所蔵巻号…創刊号

(一九四六・昭和二年四月一〇日)



「黄蜂」創刊号
1946 (昭和 21) 年

「黄蜂」は、第二次大戦終結の翌年一九四六年から四九年にかけて、五号まで刊行された総合雑誌です。

敗戦により出版統制が一举に解かれ、おびただしい雑誌が生まれては消えていったこの時期、「黄蜂」もまたとうに忘れ去られてしまつて当然の雑誌でした。しかし、戦後の思想

史や文学史関係の書物には、必ずといって良いほどその名前が登場します。戦後派文学を代表する小説、野間宏の「暗い絵」が、創刊号から第三号にわたって連載された記念碑的雑誌として、いまに記憶されているからです。

その「黄蜂」が当館の貴重雑誌になっている理由は、それだけではありません。創刊号の創作欄に、野間の「暗い絵」よりも前に置かれたもう一つの小説が、町田ゆかりの作家、桜田常久の「一人のマリア」なのです。

「黄蜂」という雑誌

「黄蜂」の編集人、寺田守という人は、一九一三(大正二)年、現在の愛知県豊田市に生まれ、東京帝国大学国文科を卒業後、中学校や女学校の国語教師を経て、海軍兵学校教授として教鞭をとった人物です。いわゆる文学青年で、事業家であつた実兄の援助で、三六歳の時に「黄蜂」を創刊します。「発刊の辞」には、「芸術と科学とに力点を置きつつ政治・経済・社会・各般の問題を扱へ特に新人の活動舞台たることが『黄蜂』の使命である」と、いくぶん気負

つた抱負が述べられています。

「黄蜂」創刊には、当時東京帝大系の若い研究者や文化人が中心となつて結成された青年文化会議が深く関わっている、というのが通説です。憲法学者の中村哲、政治思想史の丸山眞男、経済学の内田義彦、映画評論家の瓜生忠夫、作家の杉浦明平、野間宏など、のちに戦後の論壇や文壇で主導的な役割を果たす、当時二〇代から三〇代の知識人たちが、専門領域を超えた共同研究と大衆啓蒙を目的として、一九四六(昭和二)年二月に設立した組織です。「黄蜂」には、その青年文化会議のメンバーが多数執筆していて、創刊号に「暗い絵」の掲載を推薦したのも中村哲でした。

しかし、第四号から二年余り間を置いて第五号が出された翌年一九五〇(昭和二五)年に、寺田守は三八歳の若さで病没してしまいます。第五号の社告には、今後季刊として再出発する旨の記述がありますが、以後「黄蜂」が発行されることはありませんでした。

桜田常久と「黄蜂」

ここで気になるのは、どういう経緯で桜田の「一人のマリア」が、「黄蜂」創刊号に掲載されたのか、ということです。この作品の清書原稿は、当館に寄贈されている桜田の遺品の中に現存しますが、掲載の経緯に関わる手がかりは、

いまのところ発見されていません。

桜田常久は、一八九七（明治三〇）年生まれ。金沢の第四高等学校を経て、東京帝大独文科に入学。卒業後は、日本大学などでドイツ文学と演劇学を講じ、ドイツ戯曲の翻訳などに力を注ぎます。一九三一（昭和六）年一月、町田町本町田に五反五畝の農地を購入し、鎌倉から転居。書齋を「萬木草堂」と名付けて、同人誌「作家精神」などに作品を発表しながら、半農生活に入ります。

一九四〇（昭和一五）年九月、同人誌に発表した「薙露の章」が第一回芥川賞候補に、翌年一月には同じく「平賀源内」で第二回芥川賞を受賞します。さらに同年一月には「従軍タイピスト」で、第一回野間文芸奨励賞を受賞。その後も、数多くの作品を世に問い、当時原稿料が一枚一五円の作家は、菊池寛と桜田だけだと言われるほどでした。

「黄蜂」の創刊時、桜田は四九歳。帝大出身とはいえ、先の青年文化会議の少壮文化人グループとは世代が違います。むしろ彼らが

反発していた前世代の人間に属する。そんな桜田の作品が、「暗い絵」のように青年文化会議との関係で「黄蜂」に掲載された、と考えるのには無理があります。

では、誰が桜田に執筆を依頼したのか。確証はありませんが、編集責任者である寺田守自身と考えるのが自然でしょう。寺田の略歴（『愛知学院大学教養部紀要』第四七巻四号）によれば、一九四三（昭和一八）年四月、江田島海軍兵学校教授に就任しています。桜田はその前年に海軍報道班員として徴用され、フィリピンやボルネオ方面をめぐり、それらの経験をもとに『艦上日誌』を刊行するなど、当時旺盛な執筆活動を展開していました。

文学青年であった寺田が、そうした華々しい桜田の存在を知らなかったはずはありません。また、創刊号の編集後記に、今後の掲載予定として、「桜田常久氏のミレ島からの復員者を素材とした雄篇」があると記していることから、桜田と寺田の間に一定の交渉があったことがうかがわれます。ただし、次号以降の目次に、桜田常久の名前を見出すことはできません。

「二人のマリア」という小説

「二人のマリア」は、イエス・キリスト磔刑の一部始終を、マグダラのマリアとイエスの濃密な恋愛感情を思わせる描写とともに描いた、桜田にしては珍しい作品です。しかし、野間宏

の「暗い絵」が「近代文学」の平野謙や本多秋五などに高く評価され、一躍脚光を浴びたのに反して、桜田のそれはほとんど無視に近い扱いを受けます。

戦後桜田は、細々と執筆を続けながら日本農民組合に加入し、町田町農地委員会の会長を務めるなど、地域の農民運動の指導者として尽力します。晩年には『安藤昌益』（東邦出版一九六九年）や『画狂人北斎』（同七一年）、『山上憶良』（同七四年）など、歴史上の人物に取材した作品を発表しますが、一九八〇（昭和五五）年三月、町田市市中町のあけぼの病院で、「失意の半生」と自嘲した八三年の生涯を閉じました。

生前、桜田と深い親交のあった、町田ジャーナル社の故・堀江泰紹氏は回想で、「桜田先生は農民小説も試みられたけれども文壇へのカムバックは不成功に終り、専ら町田町農地委員長として農地改革に全精力を傾倒するのである」「桜田先生にとって、『芥川賞』は少々どころか、大変な重荷ではなかったか」「小説家が小説を書く場をもたぬことほどやりきれないものはない。私は、桜田先生にその苦しみを赤裸に見てきた」（『桜田常久研究』No.1一九八〇年）と記しています。

「二人のマリア」は、芥川賞作家・桜田常久が、戦後の文壇に然るべき地位を獲得すべく放った、渾身の一作であったのかもしれない。

（当館元館長 守谷信二）

（注：引用の旧字は読みやすいよう新字に変えています）

ことばらんど お宝紹介

町田市民文学館では、2006 年の開館以降、町田ゆかりの作家の自筆原稿や旧蔵品、絵本の原画などをはじめ様々な文学資料を収集してきました。その収蔵品の中から、市民の皆様にぜひご覧いただきたい“お宝”をサロンにて順次公開しています。

おぼ まこと マジカル★ツアー 展

★パートⅠ：モンスターがやってきた！

2019 年 7 月 9 日（火）⇒ 8 月 18 日（日）

★パートⅡ：世界童話旅行

2019 年 8 月 20 日（火）⇒ 9 月 29 日（日）

心優しいモンスターや個性的な動物たちが登場する物語や、グリム童話、イソップ童話などみんながよく知っている童話の原画、小川未明、宮沢賢治など日本の童話作家の作品を紹介します。絵本作家・おぼまことさんの描く不思議な生き物やかわいい動物たちと一緒に、ちょっとヘンテコでかなり可愛い「おぼワールド」を旅しましょう！



ことくん
©中垣ゆたか

2019 年度お宝紹介展示（サロン）今後の予定

（原稿・原画保護など諸般の事情により変更される場合もあります）

- おぼ まこと マジカル★ツアー展（7/9~9/29）
- 中垣ゆたか『ハロウィン ゴーゴー!』
絵本原画ミニ展示（10/1~10/27）
- 西村宗「サラリ君」展（10/29~12/28）
- 作家の手紙展（2020/1/5~3/15）
- わたなべゆういち絵本原画展（3/17~）



らんちゃん
©中垣ゆたか

「町田の文学」第 43 号 2019 年 8 月 1 日発行

編集・発行／町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田 4-16-17 TEL 042(739)3420

FAX 042(739)3421

★文学館公式ツイッター

Twitter@machida_kotoba



*この冊子は 500 部作成し、1 部あたりの単価は 250 円です（職員の人件費を含みます）